# 平和

小学校高学年　中学校　高校
社会　総合　道徳

NHKスペシャル　49分

## 村人は満州へ送られた ～“国策”71年目の真実～

（2016年放送）

### この番組の良さ

**満蒙開拓団の負の歴史を知ることができる**

「満州国」には約27万人の満蒙開拓民が日本から送られました。ソ連軍の侵攻と現地の中国人の蜂起で、日本人は逃げ惑い、多くの子供が置き去りにされました。また、逃げ切れなかった人々が集団自決に至るなど、この番組からは、戦争の恐ろしさを捉えることができます。そして1人生き残った人物の証言は、満蒙開拓団の負の歴史を視聴者に切実に伝えてくれます。

**満蒙開拓団の人間模様が浮かび上がる**

戦争末期になっても関東軍と拓務省は、農林省の力を借りて開拓民を確保し、多くの人々が現地に送られました。そんな中で河野村村長が送り出した村人は、1人だけしか生き残ることができず、責任を感じた村長は自死に至ります。開拓団の多くの人々が集団自決した事実と併せて、命の尊さについて考えさせることができます。

### 番組活用のポイント

**満蒙開拓団をめぐる戦争の恐ろしさ、多くの人々の苦悩、官僚の言動などから歴史的事象を多面的に考えさせるようにする**

長野県下伊那郡河野村では、胡桃沢村長が勧誘した結果、27戸、95人の開拓民が新たに満州へ送られました。戦況が悪化していく中、ソ連軍の満州侵攻、中国人の蜂起で、95人のうち久保田さん1人だけしか助かりませんでした。久保田さんの証言から、逃げ惑う人々が集団自決をしたことが分かります。久保田さんはその集団自決の手伝いをしたことを告白します。責任を感じた村長は、その後自死を遂げました。この政策を担当した官僚の「すべて失敗と言えば失敗、しかし、今でもいいことだったと思っています。」という言葉が胸につきささります。亡くなった人々、現地の住民、政策を進めた官僚の言動から、植民地支配や戦争の恐ろしさ、官僚の責任感の欠如、一度決まった政策は戦争中は制御できなかったことが、8万人もの犠牲者を生んだ要因となったことを理解できるようにするとよいでしょう。

**満蒙開拓団はなぜ終戦まで送り続けられたのか、その経緯を捉えるようにする**

終戦まで約27万人の日本人が満州へ送られました。なぜ、これだけの数が終戦間際まで送られ続けたのでしょうか。NHKは多くの資料や証言からその答えを導き出していきます。戦線が中国、東南アジアへと拡大していく中で、満蒙開拓民の数は減少します。食糧増産、北方警備の目的が達成できないため、関東軍・拓務省は開拓民の数を増やす秘策を考えました。それは、農村と深いつながりのあった農林省の力を借り、増員を行うというものでした。この政策により終戦間際まで満蒙開拓団が現地に送られることになります。このことがさらなる悲劇を生んだという過程を捉えさせ、政策決定のあり方（チェック機能など）はどうあればいいのかを考えさせることができます。